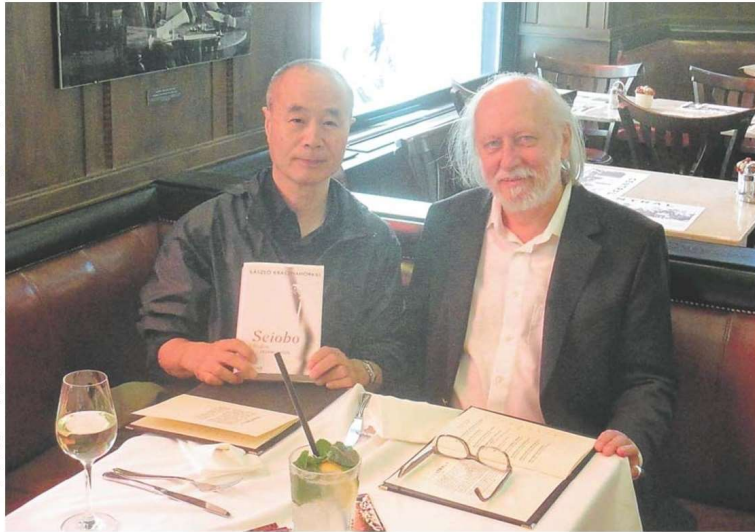


終末論者が京都で見た「光」

交流深い日独文化研・大橋良介所長に聞く

今年のノーベル文学賞受賞が決まったハンガリーの作家クラスナホルカイ・ラースローさん(71)は京都に2度滞在し、その経験を基にした作品を執筆した。「庭職人に弟子入りしていた」。20年以上の交流を続ける公益財団法人「日独文化研究所」(京都市左京区)の大橋良介所長(81)が明かす。「芸術の力を再確認させた」として栄誉に輝いた世界的作家は、京都の文化に何を学んだのか。

(樺山聡)



ノーベル文学賞に決まったクラスナホルカイさん(左)と記者写真に納まる大橋さん。2015年にハンガリーを訪れた際に小説を贈られたという大橋さん提供

ノーベル文学賞 ハンガリーの作家 クラスナホルカイさん

「祝福のメールを送ったところ、つい先日、『親愛なる大橋教授、ありがとございます』という返事が英語で届きました」

大橋さんがクラスナホルカイさんに初めて会ったのは2000年3月末。国際交流基金のフェローとして半年間、京都に滞在するにあたり、京都工芸繊維大学の教授だった大橋さんが推薦文を書き、そのお礼に研究室を訪れたという。「初対面でしたが、気も合っているという語り合った。何度か会って話すうちに、クラスナホルカイさんは意外なことを口にした。

「庭仕事をやりたいと言っているので驚きました」。大橋さんが自宅の庭を手がける職人を紹介したところ「本当に弟子入りしてしまつた。見よう見まねで土をいじり、草木に触れたという。日本を単に頭で知るところではなく、体験しようとしているという印象を持ちました。旅行者の視線ではない。京都に感入っていた。その年の4月には円山公園(東山区)の桜と一緒に見に行った。飲食を楽しむ花見客を見てクラスナホルカイさんは衝撃を受けたようだった。「ハンガリーでは屋外で人々が

2度滞在、庭職人に弟子入り

宇宙的に自然とつながる



京都の出版社「松籟社」から刊行されたクラスナホルカイさんの小説「北は山、南は湖、西は道、東は川」

集まるのは抗議をするような不適な状況の時だけ」と理由を語ったという。「彼が日本にのめり込むようになったきっかけの一つは、花見風景への驚きではないか」

京都滞在中で音楽を学ぶなどしたクラスナホルカイさんは、現代の京都を舞台に源氏物語の要素を交えた幻想的な小説「北は山、南は湖、西は道、東は川」を書き、京都の出版社「松籟社」から刊行した。

05年6月、2度目の京都滞在中に際し、大橋さんは当時の職場である大阪の大学院美学・芸術学教室にクラスナホルカイさんを招いた。彼の小説抵抗の憂鬱を映画化した「ヴェルクマイスター・ハーモニ」を院生たちと鑑賞し、上映後に原作者として作品を解説してもらった。全編白黒。2時間余りで37カットという驚異的な長回しによる「不思議で不気味な作品」だった。「あれを見て彼の問題意識に気づいた」と大橋さんは言う。

ある寒村に住む天文学が趣味の新聞配達員ヤノシユは、音楽家の老人を世話している。そんな日常がある日町にやってきた移動サカスと巨大クジラによって崩れる。「フリン」と名乗る扇動者にあおられるように住民たちは広場に集まり、町全体に破壊と暴力が充満していく。

「理性的なはずの秩序が内部から崩壊していくという終末論的な見方が映画で象徴的に表現されている」。悲観的な社会観は、ハンガリーの歴史が色濃く影響していると大橋さんはみる。オーストリアやウクライナなどに囲まれ、ロシアと近い内陸の小国は常に隣国とせめぎあい、

国際緊張を強いられてきた。戦後、ソ連の占領下で共産主義の色合いを強め、1956年にハンガリー動乱と言われる反発が起こったがソ連軍に鎮圧された。EU内でも異端で、現首相は親ロシアの姿勢を示している。

2002年にノーベル文学賞を受賞したハンガリーのユダヤ人作家イムレ・ケルテースさんもナチスドイツによって子ども時代にアウシュビッツ強制収容所に送られた経験を持つという。「国家的・民族的な危機にさらされ続けてきた歴史の現実がクラスナホルカイさんの作品にも色濃い。人工的な秩序が崩壊することは避けられないのか。その問いに、自然と宇宙的なつながりを築く京都の文化から新たな光を当てよう」と試みたのではないかと。

「ほとんど笑わず、絶えず難しい顔をしている」大橋さんは笑う。「こいつも性格は気難しきはない。作家としての深刻な現実意識がにじんでいる」

大橋さんは2015年にハンガリーの首都にあるバダベスト大に招かれ、「能面」について講演した。音楽に関心を寄せるクラスナホルカイさんが聴講に訪れ、新作「Sieio blo」を大橋さんに贈ったという。「ハンガリー語は読めないで内容が分からないが、題名から漢の武帝に不死の薬を与えた神話の女神・西王母が主題だろうと推測する」。その名前が中国語の発音ではなく、日本語発音のつづりになっていることを大橋さんは指摘した上で言う。「日本やアジアの文化に希望を見いだしているのかどうか。近々メールで尋ねてみようと思っています」